

オオクビキレガイの発生と生態

昭和60年頃から、わが国未記録の巻貝の一種オオクビキレガイ *Rumina decolata* (写真-1) が、北九州市で確認されている。本種による一般農耕地での被害は報告されていないが、幅広い食性を示すことから本種の発生状況と生態などを紹介する。

本種の原産地は地中海地域で、移入地としてアゾレス諸島、カナリヤ諸島、バミューダ諸島、キューバ島など北大西洋上の島々や米国の南部が知られている。

わが国では、北九州市の全域と同市に隣接する遠賀郡芦屋町及び山口県宇部市で発生が確認されている。多くの発生地では8～9年前から見られているようであるが、一部の地域では戦後まもない時期から発生していたようである。

生態 これまで発生が確認されている場所は、市街地の家庭菜園、空地、公園、ごみ捨て場などで、かなりの高密度で生息している。本種は周年活動が見られ、夏期には多くの個体が殻口部に白い薄膜を形成して休眠にはいる。日中は土中や石の下などに潜伏し、夜になると地上に現れて活発に活

動するが、雨天時には昼間でも活動が見られる。卵は4～5月、土中に卵塊(約16個)として産下される。稚貝は、7月頃から見られるようになり、生育するにつれて渦層が増加するが、貝高が約7mmくらいになると幼層部が欠落する。

貝の寿命及び産卵前期間については不明であるが、産卵期にいろいろな大きさの個体がみられることや1年以上飼育しても高い生存率を維持していることから、数年間は生存すると考えられる。

海外では、農作物を加害することが報告されているが、わが国では植物残渣、動物の屍体・糞、紙屑などとともに野菜・草花の幼苗や下葉を摂食している(写真-2)。一方、本種は、米国ではカンキツ類を加害する陸産貝の一種 *Helix aspersa* の天敵として利用されている。

防除 メタアルデヒド剤の散布や石灰窒素の施用が有効であるが、酸性土壌の矯正、発生源となる植物残渣の除去及び排水を良くして土壌の乾燥化を図るなど、生息環境の改善を含めた総合的な防除対策が効果的である。



写真-1 オオクビキレガイの成貝



写真-2 野菜を食害中のオオクビキレガイ